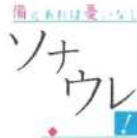


継承大切さ再確認

新燃岳噴火6年

「多くの人に知ってもらいたい」

6年前の新燃岳噴火を振り返り、体験や
教訓などを話し合った防内「ソナウレ」
プロジェクトの座談会が16日午後
都城市西岳地区公民館



霧島連山・新燃岳（1421.1m）の本格的なマグマ噴火から6年が経過した16日夕方、防内「ソナウレ」が行われた都城市西岳地区。当時は一面が灰に覆われ、その後も雨のたびに土砂災害を恐れて避難を余儀なくされた。参加した住民は座談会や災害向上訓練を通じて当時の経験や今後の対策を話し合い、噴火の教訓を引き継ぐ大切さを再確認した。（1面に関連記事）

同地区公民館であった座談会には、西家のほか公民館長や消防団長、中学生8人が参加。大量の灰が降った牛の郷地区の自治公民館長、山角一さん（74）は、黒い煙の中に稲光が見えた。たなごではないと思った」と怖さを

新燃岳の本格的なマグマ噴火から6年となる26日、睡にあり睡なご大きな被害を受けた高原町では、6小中学校で避難訓練があった。当時を振り返る授業もあり、身を守る手だてを確認した。

町教委はの口を「新燃岳を考える日」と定め、歴史や教訓を引き継ぐと、訓練や防災教育を行っている。

高原小（田島友徳校長、2889人）で行われた訓練「写真」では、噴火を伝える校内放送が流れると、児童らは噴火カラスが割れて飛び散るのを防ぐためにカーテンを閉め、教室の中心に集る。その後、ヘルメットをかぶるなど、脱出へ出る準備を整え、迎えに来た保護者に連れられて下校した。

噴火の様子を写真で振り返る授業もあり、どう対応すべきかを学んだ。6年の東城美さん（12）は「噴火した時の音や地面が揺れたことを今でも覚えている。万が一噴火したら、授業を思い出して自分で身を守りたい」。6年の

6小中校で避難訓練 高原

大石線人君（1）は「登下校中や遊んでいる時に噴火するかもしれない。避難できる建物や場所を普段から見つけておきたい」と話していた。

町では6年前の噴火の際、火除流の恐れがあるとして5・3出陣、1・5・8人を対象に避難勧告を発令。噴石や降灰の影響で農作物に約1億円の被害が出た。（新燃岳特）



語る。都城市社会福祉協議会職員の内田文子さん（64）は「高齢者が降灰で外出できず、認知症が進行した方もいた。積もった灰を除去するボランティアを受け入れも初めての経験で、御他地区の自治公民館長、福田安男さん（64）は「入員の配属やスコップなど道具の手配に一番難儀した」と語る。

今後については、設備の継承を求める声が続いた。西岳地区自治公民館連絡協議会長の坂元和雄さん（68）は「地震中に揺られて困った」などを振り返っていた。

当時小学2年生だった夏尾中2年、川村繁依さん（13）は「私たちにできることは少ないかもしれないけれど、当時を知らない妹や後輩など多くの人に知ってもらおうとした」と決意を新たにした。

災害向上訓練は、住民らが10人ほどのグループに分かれて行った。地図を前に、当時の状況をそれぞれ付箋に記入したが大変だった。「車を運転中に揺られて困った」などを

（平成 29 年 1 月 27 日 宮崎日日新聞社提供）

新燃岳噴火から6年、当時の記憶を継承していくことの大切さが再確認されています。

宮崎県県土整備部

〒880-8501 宮崎市橘通東2丁目10番1号

TEL: (0985) 26-7187 FAX: (0985) 28-9981